

ASAHI AVTM

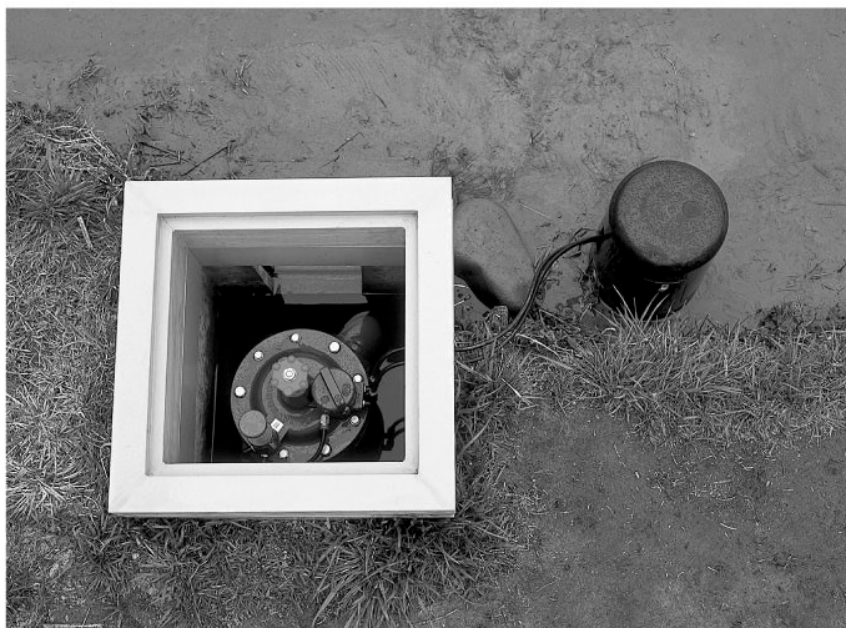
整理番号

H-V026-J-05

AV自動給水栓取扱い説明書

この『AV自動給水栓』は、かんがい用水の節約と水管理等の労働時間の短縮を図ることを目的に開発されたものです。

お買い上げいただいた方に、この『AV自動給水栓』を正しくお使いいただくために、取扱い説明書を作成しましたので、必ず、お読み戴きますようお願い申し上げます。



旭有機材株式会社

目次

| | |
|--------------------------------|-----------|
| A V 自動給水栓の取扱いについて | 1 |
| 『自動給水栓』とは..... | 1 |
| 『給水栓本体部』とは..... | 2 |
| 『切換ツマミ』の操作..... | 3 |
| (1) 『自動』で給水をする場合..... | 3 |
| (2) 『手動』で給水をする場合..... | 3 |
| 『センサー部』とは..... | 4 |
| 『センサー部』の設置方法..... | 4 |
| 『センサー部』の操作方法..... | 5 |
| 『センサー部』の..... | 6 |
| 『水量』の調整方法..... | 7 |
| 『アタッチメント』とは..... | 8 |
| 日常の維持管理等..... | 8 |
| (1) ゴミ詰り対策..... | 8 |
| (2) 通水時の注意事項..... | 8 |
| (3) 『センサー部』の周辺のごみ対策..... | 9 |
| (4) 『センサー部』の..... | 9 |
| (5) 『給水栓本体部』の保管..... | 9 |
| (6) 維持管理の注意事項..... | 9 |
| (7) 凍結防止について..... | 10 |
| 作動不良のときの..... | 11 |
| (1) 『フロート』が作動しない..... | 11 |
| (2) 給水をしないとき..... | 11 |
| (3) 給水が止まらない..... | 12 |
| (4) その他..... | 13 |
| A V 自動給水栓の水管理 | 14 |
| 水稻の水管理のやり方（一般的な例）..... | 14 |
| A V 自動給水栓による水管理の方法（例）..... | 14 |
| (1) 代掻き用水の場合..... | 14 |
| (2) 田植え直後の場合..... | 14 |
| (3) 穂ばらみ期の場合..... | 15 |
| (4) 中干し期の場合..... | 15 |
| (5) 間断かんがい期の場合..... | 15 |
| (6) 深水かんがいの場合（例）..... | 15 |

A V 自動給水栓の取扱いについて

| 事 項 | 取 扱 い 等 の 説 明 |
|-----------|--|
| 『自動給水栓』とは | <p>(1) この『自動給水栓』は、水田のかんがい用パイプラインの末端に設置される給水弁で、『給水栓本体部』と『センサー部』からなっており、それらを2本のチューブで接続します。 (図-1を参照)</p> <p style="text-align: right;">図-1</p> <p>(2) この『AV自動給水栓』を『自動』により操作(給水)することによって、“かんがい用水の節水”と“水管理等の労働時間の短縮”が図られます。</p> <p>(3) この『AV自動給水栓』は、『手動』によって操作(給水)することも出来ます。</p> <p>(4) 『給水栓本体部』のエルボ(先端部のねじ部分)に『アタッチメント』を接続し、その『アタッチメント』にホース等を更に接続することにより、畑、樹園地、ハウスのかん水・散水が出来るほか、苗代の用水、トラクター・田植え機等の洗浄も出来ます。</p> <p>※『アタッチメント』については、8頁をご覧ください。</p> |

| 事 項 | 取 扱 い 等 の 説 明 |
|------------|--|
| 『給水栓本体部』とは | <p>(1) 『給水栓本体部』は、『センサー部』と接続する2本のチューブによって『開』、『閉』が伝えられ、自動的に“給水を開始したり”、“給水を停止したり”する機構になっています。</p> <p>(2) 『給水栓本体部』の構造及び部品等の名称については、下図のとおりです。(図-2を参照)</p> <div data-bbox="619 504 1388 1131" data-label="Diagram"> <p>断面図</p> <p>この断面図は、給水栓本体部の内部構造を示しています。左側には水量調整ハンドルと切替ツマミがあり、その下には空気弁とチューブ受口が配置されています。右側には洗浄用ピストン、ダイヤフラム、ボディー弁体、およびフィルターが示されています。下部にはエルボが接続されています。</p> <p style="text-align: right;">図-2</p> </div> <p>(3) この『給水栓本体部』は、『切替ツマミ』と『水量調整ハンドル』の操作のみで“給水”することができます。 なお、『空気弁』には触れないで下さい。</p> <div data-bbox="630 1332 1284 1803" data-label="Diagram"> <p>平面図</p> <p>この平面図は、給水栓本体部の上面から見た構造を示しています。水量調整ハンドルと空気弁が左側に、洗浄用ピストンが下部中央に位置しています。右側にはエルボ、ボルト、切替ツマミ、およびチューブ受口が配置されています。</p> <p style="text-align: right;">図-3</p> </div> |

| 事 項 | 取 扱 い 等 の 説 明 |
|---|---|
| <p>『切換つまみ』の操作</p> <p>(1) 『自動』で給水をする場合</p> <p>(2) 『手動』で給水をする場合</p> | <p>(1) 『自動』で給水をする場合 『センサー部の目盛板』に『上限水位』及び『下限水位』をセットしたら、次に『切換つまみの(自動)』を『矢印⇒』に合わせると自動的に“給水”を開始します。(図-4を参照)</p> <p>(注) 『センサー部』については、4頁をご覧ください。</p> <p>(2) 『手動』で給水をする場合</p> <p>① この『AV自動給水栓』を『手動』により“給水”をするときは、『センサー部』を使用せず『給水栓本体部』の『切換つまみ』の操作のみで“給水”を行うことができます。</p> <p>② 『切換つまみの(開)』を『矢印⇒』に合わせると“給水”を開始します。(図-5を参照) (注) この場合『切換つまみ』の部分から水が、少々出る機構になっております。</p> <p>③ 『切換つまみの(閉)』を『矢印⇒』に合わせると“給水”は停止します。(図-6を参照) (注) この場合“給水”が完全に停止するまでに約30秒程度かかります。</p> <div data-bbox="1029 331 1391 582"> <p>自動の場合</p> <p>図-4</p> </div> <div data-bbox="1029 1037 1391 1249"> <p>手動(開)の場合</p> <p>図-5</p> </div> <div data-bbox="1029 1368 1391 1581"> <p>手動(閉)の場合</p> <p>図-6</p> </div> |

| 事 項 | 取 扱 い 等 の 説 明 |
|--------------|--|
| 『センサー部』とは | <p>(1) 水稻の生育に応じた水位を『センサー部の目盛板』に『上限水位』（給水を停止したい水位）と『下限水位』（給水を開始したい水位）をセットすることにより、水稻の生育に応じた水位をこの『センサー部』が検出すると、『給水栓本体部』を操作（給水又は、停止）する役目をもっております。（図-7を参照）</p> <p>(2) 『センサー部』の構造及び部品等の名称については、下図のとおりです。</p> <div data-bbox="606 649 1396 1220" data-label="Diagram"> </div> <p style="text-align: right;">図-7</p> |
| 『センサー部』の設置方法 | <p>(1) 『センサー部の目盛板』等の操作は、畦畔側から行いますので、『目盛板』が畦畔側を向くように、『センサー部』を設置して下さい。（図-8及び9を参照）</p> <div data-bbox="750 1411 1197 1680" data-label="Diagram"> <p style="text-align: right;">図-8</p> </div> <div data-bbox="614 1691 1300 2004" data-label="Diagram"> <p style="text-align: right;">図-9</p> </div> |

| 事 項 | 取 扱 い 等 の 説 明 |
|--------------|---|
| 『センサー部』の操作方法 | <p>(2) 『センサー部』の設置は、田面より深さ約 15 cm・直径 25 cm の穴をスコップ等で掘り、『センサー部』をその穴に埋めて下さい。(図-10 を参照)</p> <p>(3) その場合、『センサーケース』の外側にある『埋設基準線(白線)』(田面の位置を白線で示す)を面の高さに合わせて設置し、周りを埋め戻しながら固定をします。</p> <p>(4) 『センサー部』の周りを埋め戻す際、そのセンサーケース内に土が入らないようにして下さい。</p> <p>(5) 『センサー部』の設置は、田面に垂直になるように設置をしてください。</p> <p>(6) 『センサー部』の下にコンクリート板や砂利等を敷かないようにして下さい。</p> |
| | <p>(1) 『目盛板』に水位をセットする時は、まず、『センサーケースの蓋』を取り外して下さい。</p> <p>(2) 水稻の生育に必要な水位を『目盛板』の水位を示す数字に合わせて、まず、『上限水位』をセットします。(図-11 を参照)</p> <p>(3) 『自動』によって“給水”をすることにより、一定の水位の確保と過剰取水の防止が出来るので、“かんがい用水の節水”が図られます。</p> <p>(注) この『AV自動給水栓』による具体的な『水管理の方法』については、12・13 頁の『AV自動給水栓による水管理の方法(例)』等をご覧ください。</p> |

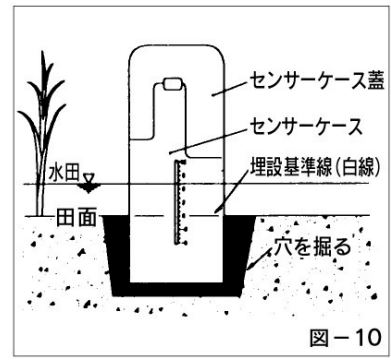


図-10

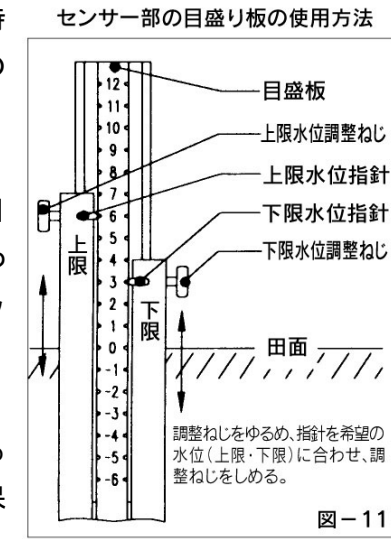
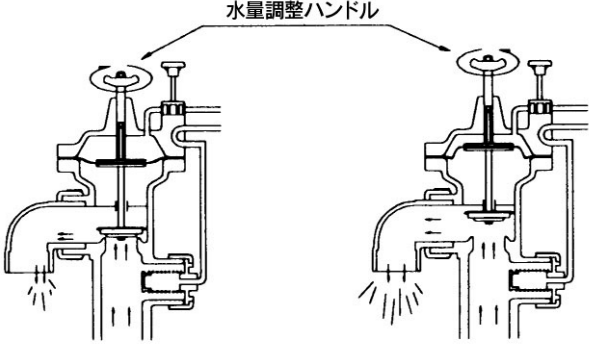


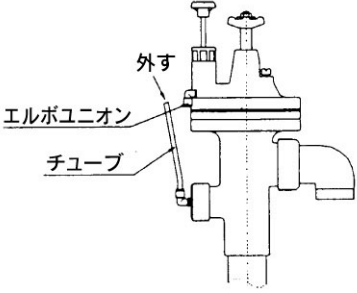
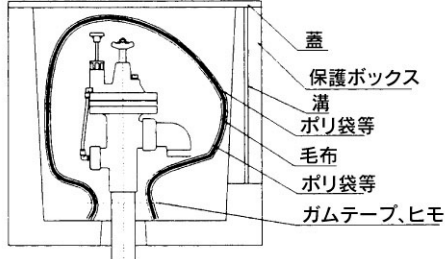
図-11

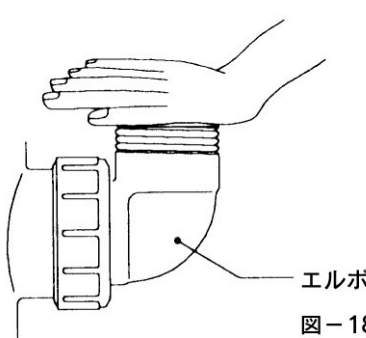
| 事 項 | 取 扱 い 等 の 説 明 |
|---------------------------------|---|
| <p>『給水栓本体部』と『センサー部』のチューブの連結</p> | <p>(1) この『AV自動給水栓』を『自動』により操作(給水)をする時は、『給水栓本体部』と『センサー部』を2本のチューブで連結をしてください。(図-12を参照)</p> <p>(2) 『チューブ受口』は、センサー部の『上側』と『下側』で区分されており、『チューブ』の連結は、それぞれの『チューブ受口』の位置と表示に従って連結をしてください。</p> <div data-bbox="588 555 1390 1025" style="text-align: center;"> <p>給水栓本体部 センサー部</p> <p>チューブ受口(黄銅色) チューブ受口(銀色)</p> <p>チューブ受口(銀色) チューブ</p> <p>チューブ受口(銀色) チューブ受口(黄銅色)</p> <p style="text-align: right;">図-12</p> </div> <p>(3) 『チューブ』の接続(差し込み方・抜き方)は、ワンタッチでするので簡単に出来ます。(図-13及び14を参照)</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="625 1173 979 1585" style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;"> <p>1 チューブの差し込み方</p> <p style="text-align: center;">「ワンタッチ継手受口」</p> <p>(注)チューブを「ワンタッチ継手受口」にそのまま差し込む</p> <p style="text-align: right;">図-13</p> </div> <div data-bbox="1007 1173 1390 1585" style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;"> <p>1 チューブの抜き方</p> <p style="text-align: center;">「ワンタッチ継手受口」</p> <p>(注)「ワンタッチ継手受口」の「ア」の部分を押しながらチューブを引き抜く</p> <p style="text-align: right;">図-14</p> </div> </div> <p style="text-align: center;">(注)「チューブ受口」のプッシュリングを押さないとチューブはロックがかかっており抜けません。</p> <p>(4) 『チューブ』は、長さ 150 cm のものがセットしてありますが、長すぎる場合は、適当な長さに切ってから使用してください。</p> <p>(注) 『チューブ』の切断面が、斜めにならない様にカットしてください。</p> |

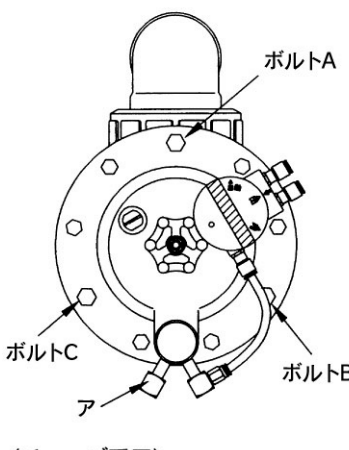
| 事 項 | 取 扱 い 等 の 説 明 |
|-----------|---|
| 『水量』の調整方法 | <p>(1) この『AV自動給水栓』の水量の調整は、『給水栓本体部』の上部の中央にある『水量調整ハンドル』を回すことにより、水量の調整をすることができます。(図-15を参照)</p> <p>(2) 給水量を多く出したいときは、『水量調整ハンドル』を緩める(左回し)ことによって吐出量が増えます。又、給水量を少なくするときには、『水量調整ハンドル』を絞る(右回し)ことによって吐出量は少なくなります。</p> <div data-bbox="603 595 1394 1093" style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> <p>水量を少なくするとき 水量を多くするとき</p> <p>水量調整ハンドル</p>  <p>※「水量調整ハンドル」を絞る (右回し) ※「水量調整ハンドル」を開ける (左回し)</p> <p>図-15</p> </div> <p>(注) 流量条件によっては、弁を絞って使用しますと弁体が振動し損傷につながる恐れがあります。振動が生じた場合は、振動がなくなるまで「水量調整ハンドル」を緩めて(左回し)弁を開けてご使用ください。</p> |

| 事 項 | 取 扱 い 等 の 説 明 |
|--|---|
| 『アタッチメント』とは | <p>(1) 『給水栓本体部』の吐出口（エルボ）の先端部に『ねじ部』があり、その部分に『アタッチメント』（竹の子式・15 mm、20mm、25 mm、50mm 及びマチノ式等）を接続することができます。</p> <p>(2) 『アタッチメント』にホース等を接続することにより、畑・樹園地・ハウス等のかん水・散水が出来るほか、苗代等の用水、田植え機の苗箱の補給水及び、トラクター・田植え機等の洗浄にも使用することができます。（図-16を参照）</p> <div data-bbox="598 600 1385 1059" data-label="Image"> </div> <p>図-16</p> <p>(注) この『アタッチメント』は、別売りになっております。</p> |
| <p>日常の維持管理等</p> <p>(1) ゴミ詰り対策</p> <p>(2) 通水時の注意事項</p> | <p>(1) 『給水栓本体部』のフィルター及びチューブ等のゴミ詰まりを防止するため『洗浄用ピストン』を設けてありますので、時々、この『洗浄用ピストン』を数回押してください。この場合、給水をしている状態のときに押してください。（図-17を参照）</p> <div data-bbox="1002 1220 1393 1713" data-label="Image"> </div> <p>図-17</p> <p>(2) パイプラインの施工をした直後等は、パイプの中に土砂やゴミ等が溜っている場合があるので、はじめて“通水”をするときは、必ず、この土砂やゴミ等を排泥弁等より十分に吐出してください。</p> |

| 事 項 | 取 扱 い 等 の 説 明 |
|-------------------------|---|
| (3) 『センサー部』の 周辺のゴミ対策 | (3) 水田の表面にあった藁クズやゴミ等が、水田に水を張ることによって水面にそれらのゴミ等が浮いてきます。そして、風が吹くとそれらのゴミ等は『センサー部』の周辺に集まり、『センサー部』(特にフロート)の作動の邪魔をしたりすることがあるので『センサー部』の内部や周辺に溜まっているゴミ等を取り除いてください。 |
| (4) 『センサー部』の 保管 | (4) 水稻の収穫の前には“落水”をしますが、落水後は、この『センサー部』は使用をしなくなるばかりか、稲刈り機による農作業の邪魔になるので、『給水栓本体部』から『2本のチューブ』と『センサー部』を取り外し、自宅に持ち帰り、水洗いをした後、乾いたら“ポリ袋”等に入れて保管してください。 |
| (5) 『給水栓本体部』 の保管 | (5) この『給水栓本体部』は、耐食性・耐寒性・耐衝撃性に優れた“プラスチック”で製造しておりますが、使用をしないときは、給水栓ボックスに『蓋』をするとともに、『給水栓本体部』に“ポリ袋”等を被せておくと、更に長持ちを致します。 |
| (6) 維持管理の注意 事項 | <p>(6) - 1 この『AV自動給水栓』の、主要な金属部分は、“ステンレス”になっておりますので錆びません。従って、グリースや油を差さないで下さい。</p> <p>(6) - 2 長期保存、休転時または使用中の温度変化により、ダイヤフラム部のボルトに緩みが生じ漏れる恐れがあります。もし、漏れが生じた場合はボンネットとボディ間のボルト・ナットを締め付けてください。 (下図参照ください。)</p> <div data-bbox="805 1523 1268 1937" data-label="Image"> </div> |

| 事 項 | 取 扱 い 等 の 説 明 |
|--------------|---|
| (7) 凍結防止について | <p>特に冬期においては、自動給水栓内に水が入っていると水の凍結・膨張により自動給水栓が破損する恐れがあります。これを防止する為に次のようないずれかの対策を行ってください。</p> <p>(7)－1 自動給水栓を凍結による破損から守る為には、まず第一に落水する(自動給水栓内の水を抜く)様にしてください。落水方法は下記の要領にて行ってください。</p> <p>①自動給水栓上流側の仕切弁を全閉にし、自動給水栓への給水を止めてください。(仕切弁より下流側の配管内の水を抜いてください。)</p> <p>②自動給水栓に圧力がかかっていない事を確認し、右図の様に連絡チューブをエルボユニオンより抜きます。この時、チューブの曲り、破損、紛失が無いように注意してください。 (チューブの抜き方は6頁の(3)を参照してください。)</p>  <p>(7)－2 上記の対策が出来ない場合は、保温対策を行い自動給水栓が凍結しないようにしてください。</p> <p>①自動給水栓の保護ボックスを設置するとともに、保護ボックスには蓋をしてください。(蓋をすることで保温効果があります。)(注)強風により蓋が飛ばされる恐れがありますので、蓋が風に飛ばされないようにしてください。</p> <p>②自動給水栓の保護ボックスの開口部側に溝を作り、その部分に板等を差し込んで外部からの冷たい風の侵入を遮断することで保温効果があります。更に、ボックス内部をウレタン等で囲うとより効果的です。</p> <p>③自動給水栓の本体部にポリ袋等を被せ、そのポリ袋の下部をガムテープ及びヒモ等でとめると、(ワンタッチ継手・エルボユニオン等の)凍結防止効果があります。また、被せたポリ袋等の上を、古毛布等で、その上に再度ポリ袋を被せることで、更に効果的です。</p> <p>保温対策例</p>  |

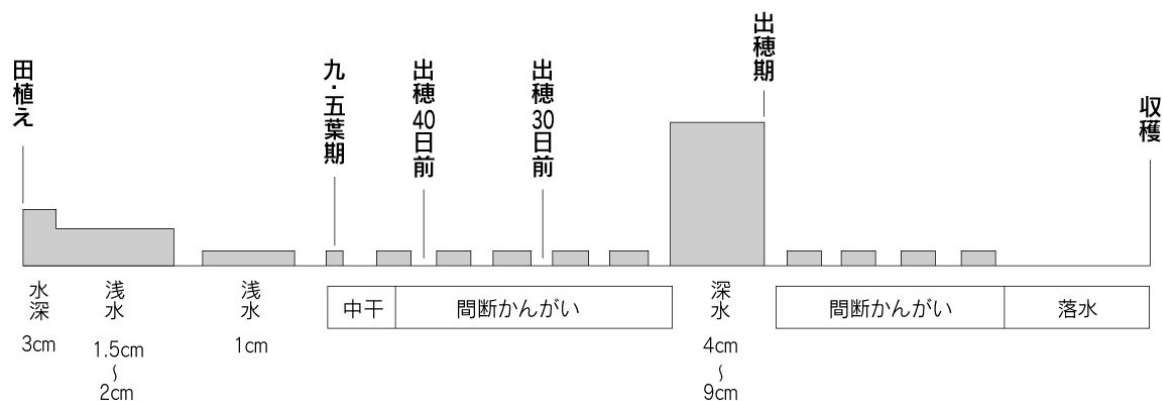
| 事 項 | 取 扱 い 等 の 説 明 |
|---------------------------------|--|
| <p>(3) 給水が止まらないとき(弁が閉じないとき)</p> | <p>(1) 万一、『弁が閉じないとき』は、次のことを“チェック”するとともに、下記の“処置”をして下さい。</p> <p>① 『センサー部の目盛板』に『上限水位及び下限水位』を正しくセットしたにも拘わらず『給水が止まらない』ときは、『切換ツマミ』を“チェック”して下さい。</p> <p>〔処置〕 『切換ツマミ』が『手動の(開)』になっていたら、『(自動)』に切換えて下さい。</p> <p>② 『給水栓本体部の弁座』に異物をはさまっていないか、について“チェック”して下さい。</p> <p>〔処置〕 ア) 『給水栓本体部』の上部にある『切換ツマミ』を手動の『(閉)』にします。</p> <p>イ) 『給水栓本体部』の吐出口(エルボ)を上の方に向けるとともに吐出口(エルボ)の先端部を手のひらで押さえてください。 (図-18を参照)</p>  <p>ウ) 『給水栓本体部』の上部にある『切換ツマミ』を『手動の(開)』にするとともに、『給水栓本体部』の上部にある『水量調整ハンドル』を徐々に緩め(左回し)ますと吐出量が増し、手のひらで押さえている吐出口(エルボ)の部分に、水圧がかかってきます。 そして、その水圧が段々と強くなり、押さえきれなくなったところで、吐出口(エルボ)から手を離します。そうすると、弁体と弁座の隙間にあった小石、小魚、貝類等の異物は、水圧によって給水と一緒に取り除かれます。</p> |

| 事 項 | 取 扱 い 等 の 説 明 |
|---------|--|
| (4) その他 | <p>③ ②の方法でも『給水栓本体部の弁座』の異物が除去できない場合。</p> <p>〔処 置〕 『給水栓本体部の弁座』に異物がはさまっているものの処置は大変危険ですので、土地改良区等と十分相談をしたうえで、次の処置をしてください。</p> <p>ア) 『給水栓本体部の弁座』の処置をする場合は、『ポンプ』が停止しているか。又は、そのかんがい用水のパイプラインの上流側の『制水弁』が閉じていることを十分確認したうえで、次の作業をして下さい。(図-19を参照)</p> <p>イ) 右の図の『ア』の部分のチューブを外して下さい。</p> <p>ウ) 『自動給水栓』の上部にある『水量調整ハンドル』を緩めて(左回し)ください。</p> <p>エ) 『自動給水栓』の上部の『ボンネット』と『ボンネット取付台』を固定するための3本のボルト(右の図のA, B, C)を外し、『ボンネット部分』を上引き抜いてください。</p> <p>オ) 上から覗くと異物が見えますので、その異物を取り除いてください。</p> <p>カ) 異物を取り除いたら、『ボンネット』部分を取り付け、ボルトを締めてください。</p> <p>キ) 『ア』の部分のチューブを取り付けて下さい。</p> <p>上記の(1)～(3)の処置をしても解決しないときは、土地改良区等にご連絡下さい。 弊社の社員等が現地に出向いて調整・補修等の作業を行います。</p> <div data-bbox="1021 698 1388 1332" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p style="text-align: center; margin: 0;">給水栓本体部</p>  <p style="text-align: center; margin: 0;">(チューブ受口)</p> <p style="text-align: right; margin: 0;">図-19</p> </div> |

A V 自動給水栓の水管理

水稲の合理的な水管理は、その地方の気象条件、稲の品種、育苗様式、田植えの時期、土壌・水利条件、それぞれの農家の技術水準等によって違います。

ここでは、一般的な水稲の水管理の方法について記載しますので参考にして下さい。
水稲の水管理のやり方（一般的な例）



A V 自動給水栓による水管理の方法（例）

(1) 代掻き用水の場合

- ① 代掻き用水を給水するときは、その地区を数ブロックに分割して給水を行います。その場合、パイプラインの系統、又は、地形等を考慮して“一つの給水ブロック”を設定します。
- ② そのブロックごとに“ローテーション”を取り組んで“給水”をすると、地区内の水田等に“給水”をすることが出来ます。
その場合、『センサー部の目盛板』に代掻きに必要な水位が確保出来るようにセットするとともに、『自動』により“給水”をします。
- ③ 代掻き用水の確保が出来たら、水田に設置した『センサー部』を一時取り除き、畦畔等に置きます。
- ④ そして、代掻きと田植え作業をしますが、それらの作業が終わったら、再び、その水田に『センサー部』を設置します。
その場合、『センサー部の目盛板』に水稲の育成に必要な『上限水位』と『下限水位』を正しくセットして“水管理”をしてください。

(2) 田植え直後の場合

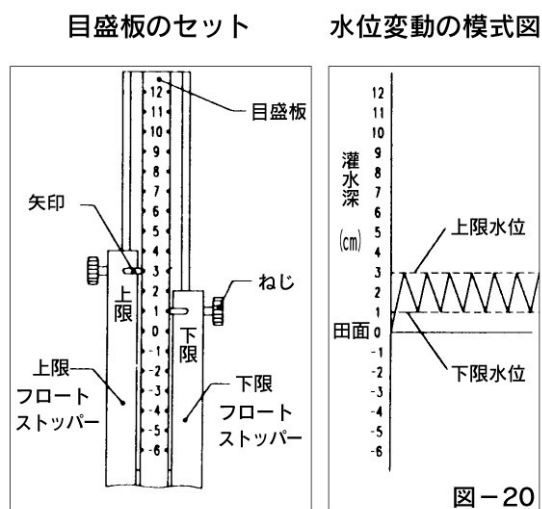
水稲を移植して活着するまでは、水稲が水没しない程度の水深で水稲の保定と保温を図るとともに葉の乾燥を防ぎ、早期に活着させるようにします。

そのためには、目盛板の『上限水位』を3cmのところセットするとともに『下限水位』を1cmのところセットします。

(図-20参照)

◆ 田植え直後は浅めにかんがいた場合

| | | | |
|------|-----|------|------------|
| 上限水位 | 田面上 | 3 cm | } 水位幅・2 cm |
| 下限水位 | 田面下 | 1 cm | |



(3) 穂ばらみ期の場合

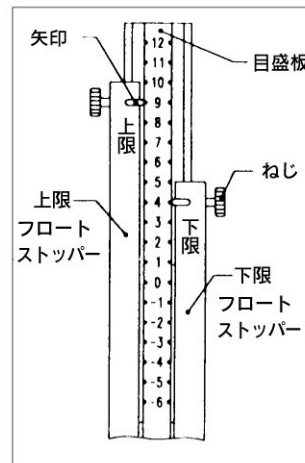
穂ばらみ前後は、水稻の生育に一番大切な時期ですので、深めにかんがいをしながら生育を促進させます。

そのためには、目盛板の『上限水位』を9 cm のところにセットするとともに『下限水位』を4 cm のところにセットします。(図-21 参照)

◆ 生育時は深めにかんがいた場合

| | | | |
|------|-----|------|------------|
| 上限水位 | 田面上 | 9 cm | } 水位幅・5 cm |
| 下限水位 | 田面下 | 4 cm | |

目盛板のセット



水位変動の模式図

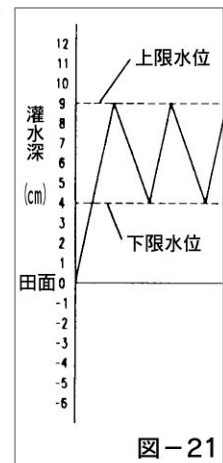


図-21

(4) 中干し期の場合

田面から水を落とし、水稻の無駄な分けつの発生を防ぐとともに土中に酸素を送り根の伸長を図ります。

◆ この『AV自動給水栓』は、自動で操作が出来ますが、より長い中干しが必要なときは、『切換えつまみ』を『閉』にすることにより給水は完全に停止します。

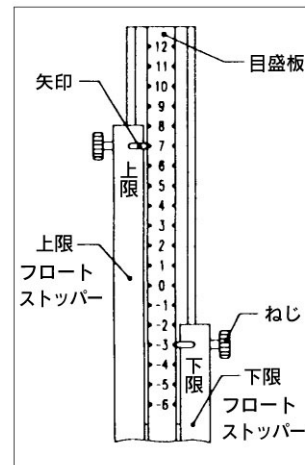
(5) 間断かんがい期の場合

水稻の刈り取りをする15日(程度)前までは、間断かんがいをを行います。

これは、水田に水を入れた後、数日間そのままにしておき、土がしまってきたら、又、水を入れるという方法です。

これを繰り返すことによって、水稻の根の機能低下を防ぐとともに水稻の生育を促進します。そのためには、目盛板の『上限水位』を7 cm のところにセットするとともに『下限水位』を-3 cm のところにセットして、水位幅を大きくします。(図-22 参照)

目盛板のセット



水位変動の模式図

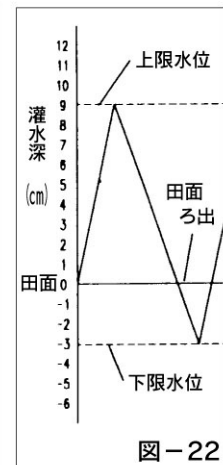


図-22

◆ 生育期に間断かんがいをした場合

| | | | |
|------|-----|-------|-------------|
| 上限水位 | 田面上 | 7 cm | } 水位幅・10 cm |
| 下限水位 | 田面下 | -3 cm | |

(6) 深水かんがいの場合(例)

冷害等による水稻の減収を防止するため、その地方の気象と水稻の生育の時期に合わせた的確な水管理(深水対策等)をすることが大切です。

そのためには、目盛板の上限水位を12 cm にセットします。そして、気象状況等に注意するとともに、更に深水(12 cm 以上)をするときは、『切換えつまみ』を『開』にして“給水”して下さい。

※深水かんがいをするときには、気温と水温の差が少ない夜間に“給水”をするようにし、日中には、“給水”をしないようにして下さい。

旭有機材株式会社

本取扱説明書に記載されている製品名、ロゴ、その他の商標は、すべて旭有機材株式会社の登録商標です。これらの商標は、旭有機材株式会社の知的財産であり、許可なく使用することはできません。本書のいかなる内容も、明示または黙示による商標の使用許諾を与えるものではありません。登録商標に関する詳細については、旭有機材株式会社にお問い合わせください。

販売代理店

旭有機材ホームページ
<https://www.asahi-yukizai.co.jp/>